

## 生田春月所蔵洋書目録（1）

佐野晴夫

1930年5月19日深夜、別府行き大阪商船の莖丸から、生田春月（1892-1930）が播磨灘で投身自殺をしたあと、船室にのこされたトランクの中には、ステファン・ツヴァイク著「デーモンとの闘い」（1925）の原書がまじっていた。また彼が死に旅立つ前の最後の仕事で、新潮社発行「世界文学全集・第10巻」（1939.5）に収めるヘルマン・ブーダーマン著「猫橋」の翻訳であった。このように、彼の文学活動と精神的経歴は、外国の文芸と思想とに密接にかかわり合っていた。

彼が南江堂や南山堂でレクラムの文庫本を、中西屋や丸善などで洋書を購入するようになったのは、明治45年（1912）より1年余り、満20歳になって、初めて、ドイツ語を東京神田の夜学で学び始めてからのことである。そして大正末期の日本文壇で、彼の所有する洋書の総数は、数千冊におよび、芥川竜之介と双壁をなす、と称せられるまでになった。

そしてレクラム叢書だけでも、ほぼ400冊に達した。仲間のあいだで、レクラム本を最も多数所有しているものは、わが国では、のちほど洋書目録中にも見える「小品集」の著者ケーベル博士で、それに次ぐのが春月だ、と噂された。事実、大正時代の初期、牛込に住む春月を、翻訳家布施延雄を連れだって訪問したときの状況を、小説家宇野浩二は「文学の三十年」の中で回想的に描写している<sup>(9)</sup>。春月の借家は、露路の奥の陽にあたらぬ6畳と4畳半の2間からなり、2坪の庭より、暗い6畳を通ると、狭い隣室が春月の書斎で、窓下に机があり、それと直角の位置に、春月のため、花世夫人が貯金をおろして購入したという青い絹のついた本箱があった。「その本箱には、ほかの本は一冊もなく、レクラムの本だけがぎっしりと詰められてあった。春月は、客が来ると、机の前で、横を向いて、話をする癖があったので、客の方から見ると、いつもレクラム文庫を背負っているやうに見えた。しかし、そのレクラム文庫が1867年（慶応3年）に創刊され、星1つ40ペニヒ（20銭）であるから、『僕は、本郷へ行ったついでに、南江堂や南山堂によって、12づつ買ってくるんだよ、古本屋だったら、星3つのレクラムが30銭ぐらいで買へるからね』などといふ話を春月から聞かされると、それだけで、私などは、驚かされ、『これだけの本が読めたらなあ』と尊敬したものであ

る」<sup>(2)</sup>。

また親友の小説家中村武羅夫も、春月が貧乏の中でも、少しばかりの原稿料が入ると、いそいそと丸善や中西屋等へ出かけて、本を購入して帰る様子を目撃している。そして読書も好きであるが、本そのものも愛していた有様を、追悼文「生田春月のこと」の中で、次のように述懐している。「包みを抱へて帰って来ると、机の前に坐って、如何にも楽しさうに、それ拵げては眺めまわし、いちくりまはして喜んでいたことか！そして根気よく読んだ。読めば、必らずアンダー・ラインを引く癖があった」<sup>(3)</sup>。後年、原稿書きで多忙になると、春月に師事する詩人真船正己が丸善本店に勤務していたこともあり、注文した洋書を届けてもらったり、助手の西島治子に依頼して、本郷の福本書院や郁文堂などへ買いに行ってもらったりした<sup>(4)</sup>。確かに、春月に印税が入ると、全額本代へつきこむと、花世夫人が不平をもらすほど、春月は、自分の意図する個人図書館を完成するため、愛着と精根とをこめて、洋書収集に傾注したのである。しかも、彼のコレクションは、のちほど明白となるごとく、確実に、彼の文学上の、また精神上的の志向を裏書きするものであった。無類の愛書家である春月にとって、本来ならば、蔵書を捨てるということは、過去から未来へと通ずる自らの生の軌跡の否定と揚棄に通じ、彼の魂は、到底、その苦痛にたえられないほどである。ところが、イタリアの海で溺死した英国詩人シェリーに憧れ、「海との結婚」を願望しながら、入水を果たしたとき、春月には、自らの生と同様に、蔵書への執着も、いとも容易に断ち切ってしまうのである。かくして数千冊の蔵書が、あとに遺された。

瀬戸内海で遺体がまだ発見されない1930年5月25日、牛込の多聞院で告別式が営まれることになり、その前夜、転居して2ヶ月しか経ない弁天町44番地の家で通夜が行われた。小説のモデル問題で9年間も絶交状態であった佐藤春夫が弔問に訪れた。そして彼は2階の春月の書齋に並ぶ蔵書の大きさに眼をみはり、本棚の洋書を次々きぬ出し、手早く頁をめくると、いずれの原書でも、春月が通読したあかしである赤鉛筆のアンダーラインを見て、「参った！」と叫んだ。あらためて生田長江門下の兄弟子の勉学の精進ぶりに驚嘆し、その博覧強記について、同席の中村武羅夫、加藤武夫、福士幸次郎、長谷川時雨、中村詳一、佐々木千之、石川三四郎たちと話し合ったという。このエピソードをふくめ、春月の蔵書の行くえに関して、判明した事柄については、「山口大学・独仏文学」第8号（1986）の「生田長江と生田春月のニイチェ（5）—日本におけるニイチェ受容史より—」（P.61-64）の中で、かなり詳述しておいたが、春月の蔵書は、他の遺産と同様に、花世夫人と実弟生田博孝との間で二分されることになった。まず、生田花世

のうけ取った蔵書の一半のうち、かなりの冊数は、全国にいる春月の主だった門弟に形見として贈られ、またレクラム本200冊は1939年に日独文化協会へ寄贈され、残りの書籍は1945年の2度にわたる空襲によって、ことごとく焼失してしまった。従って、死後、昭和女子大学近代文庫に寄贈され彼女の蔵書1,270冊余りのリストの中には、「春月山房」等の蔵書印のおされたものが皆無である。これに対して、生田博孝の相続した一半の蔵書については、彼が大陸で官吏となっていた1943年頃に満州国中央図書館へ寄贈されているという事実以外は、皆目わからなかった。

1978年頃から、筆者が春月のことを調べはじめると、早速、春月の親友や門下生たちで組織された「春月会」という結社の存在を耳にした。春月の歿後、若い詩人たちが、佐藤信重を中心に追悼詩集「海図」（1930、交蘭社）や「新興詩隨筆選集」（1932、詩と人生社）を公刊し、遺稿の詩に因んで名付けられた雑誌「海図」（1931年創刊）を発行して、仲間の結束を固めていた。そして1934年7月には、春月会規約をつくり、中心メンバーのひとり大島庸夫の自宅を事務所にして、会報を発行し、やがて「海の詩碑」を小豆島に建てる募金活動を始めることになる。

その「会報」（1935、5）を見ると、春月会は、基金募集のため、2月14日より1週間、日本橋白木屋5階ギャラリーで諸名家色紙短冊即売会を開き、その事業報告のあと、「本会の目的は故生田春月の思想、芸術並にその生活につき真摯且つ厳正なる批判を試み、資料の蒐集をなし、随時講演会を開き、春月研究のパンフレット又は未発表の作品等を上梓します」という規約に基づき、第1回春月研究会を1935年10月14日に新宿ヴェルテルで開催し、次いで同年12月16日に京都支部で、同月19日に大阪支部で座談会を催した報告が行われている。そのあとに資料収集の成果に触れ、春月会が保管する春月の著書や日記・断片・書簡をふくめた未発表の原稿を列挙した末尾に「春月愛蔵書（和洋書）1千余冊（目録作成中に付追って書名発表す）」という個所があった。これらは、どうやら生田博孝のもとに保管されていた蔵書のように推定され、これに力を得て、春月会の主要メンバーの詩人たちに照合した。しかし、誰ひとりとして、蔵書目録が公表されたという事実を記憶している人物はいなかった。

ところが、数年経過した1985年2月に、筆者が詩集「渾沌の児」（1932.4、同刊行所）の著者にして、ハイデガー「存在と時間」上・下巻（1960.6；1966.5、勁草書房）の卓抜した翻訳者でもある松尾啓吉と面談した際、すでに過去2回面談しながらも、思い出してもらえなかった洋書目録が、転居したとき、見付かったと告げられ、生田博孝保管の洋書のかなりの部分を記録したノートを見せても

らえ、そのコピーを入手することが出来た。

1930年秋、東京麻布の郵便局に勤務していた生田博孝が、いかなる目的で蔵書目録を作製しようとしたのか、判然としないけれども、春月と同じ独逸語専修学校へ通学し、初級段階を終えたばかりの松尾啓吉に対して、洋書の書名と著者、およびその邦語訳を依頼した。そこで、松尾青年は3、4日夜間、麻布十番に住んでいた生田博孝宅へ通って筆写した。後年、直訳の文章に解釈をふくむ意識を小さな活字で並記するという前代未聞の、ユニークな翻訳方法を編み出したハイデガー研究者も、この時点では、発行地（出版社）や刊行年次を記す必要があることを逸していた。この作業が短期間でのリスト作製であったこともあり、筆者へ宛てた私信の中に「書名確認の不完備や誤りに気づかわし向きは、そのかたの名において補完・修正願いたい」とあった。その言葉に従って、「不完備」と思われる出版地（わかるものは書肆も）と出版年数を調べ、副題のあるものは補い、頁数や叢書名称が明らかなものは添え、わずかながら見つかった「誤り」は訂正しながら、より完備したものへ近づける試みに取りかかることにした。その復元を計るために、各著者の文献表を参照し、また春月がドイツ語を学び始める直前から、逝去するまでの期間に相当する1900年から1930年にかけての“Deutsche Buchenverzeichnis: Eine Zusammenstellung der in deutschen Buchhandel erschienenen Bücher, Zeitschriften und Landkarten. Mit einem Strich- und Schlagwortregister. Bearbeitet von der Bibliographischen Abteilung des Börsenverein der Deutschen Buchhändler zu Leipzig”を利用することにした。そして、記録に残されたものが、書名と著者のみであるから、同一の出版社から重版が出ている場合、春月が購入したと推定される時点の版を選んで記した。だが、ゲーテの全集や詩集のように、同一の書名で多数の出版社から同一時期に刊行され、春月の使用したテキストが特定しえないものもある。それ故に、これらを前者から区別するために、△印をつけることにした。

ところで、松尾啓吉が記録したまま、未整理の状態、書名と著者を列記するものも一方法であるが、筆者は別の方法をとった。なぜなら、多くの詩人のように、学校での普通教育のコースを経ず、春月は独学力行のすえ、変則的に、高い知識と教養を有する詩人となったのであるから、読書と勉学も、いわば、自分の欲するものへ偏する傾向が顕著にあらわれているからである。つまり、春月が最も関心を寄せ、最も志向するものは、文芸関係と社会・思想関係との領域にある。事実、春月の業績の本領も、この二分野にあると言ってよう。そこで、春月の蔵書リスト作製に際しては、文芸と社会・思想との二分野に大別し、さらに文芸に

関しては、国別または言語圏に従って分類し、通覧することによって意義深くなり、また社会・思想のジャンルにおいても、一瞥すれば、春月がいかなる思想と時代思潮とに共鳴し、いかなる哲学者に共感し、また反撥していたか、を如実に示すような工夫が必要である。この前提にたちながらも、だが、同一の著者と共通の内容という原則に従って、整然と類別し列挙することが困難となり、部分的に原則をやぶらざるをえない場合が生じたことを断っておかなければならない。

しかも、この号では、「生田博孝保管生田春月蔵書目録（筆記者・松尾啓吉、編集者・佐野晴夫）」のうち、文芸関係のみを掲載する。次号において、社会・思想関係のものを掲載し、かつ、目録全体から判明する事柄を論ずる。そして、また、生前の春月から、あるいは花世夫人から、形見分けとして、愛弟子たちへ贈られた洋書のうち、現存するものの一部や、さらには春月の評論・随想・研究の中に記された書名のうち、少なくとも、確実に所蔵したと推断してよいものの書目も、あわせて挙げてみたい。

生田博孝保管「生田春月蔵書目録」(筆記者・松尾啓吉,編集者・佐野晴夫)

A. 文芸関係

a. 文学一般

1. Aristoteles: Über die Dichtkunst. Übersetzt von Alfred Gudemann. (XXIV, 91 S.) 1921.
2. Hermann Hefele: Das Wesen der Dichtung. (236 S.) 1923, (F.Frommann) Stuttgart.
3. Albert Steffen: Die Krisis im Leben des Künstlers. (148 S.) 2. Auflage. 1925, (Grethlein&Co.) Zürich.
4. Julius Bad: Nebenrollen. Ein dramaturgischer Mikrokosmos. (254 S.) 1913.
5. Egon Erwin Kirsch: Klassischer Journalismus. Die Meisterwerke der Zeitung. (763 S.) 1923, (R.Kaemmerer) Berlin.

b. 独文学

6. Emil Ermatinger: Die deutsche Lyrik seit Herder. 2 Teile. (1. Von Herder zu Goethe VI, 448 S.; II. Die Romantik, 311 S.) 1921, (B.G.Teubner) Leipzig.
7. Adolf Bartels: Die deutsche Dichtung der Gegenwart. Teil 3: Die Jüngsten. (VIII, 248 S.) 1921, (H.Haefel) Leipzig.

8. Franz Blei: Das große Bastiarium der modernen Literatur. (253 S.) 1922, (E.Rowohlt) Berlin.
9. Oskar Walzel: Deutsche Romantik. 1. Welt- und Kunstanschauung. 4. Aufl. (VI, 116 S.) 1918, (B.G.Teubner) Leipzig.
10. Ricarda Huch: Die Romantik. 2 Bde. 1920, (H.Haessel) Leipzig.
11. Philipp Witkop: Frauen im Leben deutscher Dichter. (208 S.) 1924, (H.Haeffel) Leipzig.
12. Curt von Peter: Neu-Romantik. (95 S.) 1920, (L.Simion) Berlin.
13. Wilhelm Dilthey: Das Erlebnis und die Dichtung. (VII, 482 S.) 1905, (B.G.Teubner) Leipzig.
14. G.G.Lessing: Gesammelte Werke. Bd. 2 in 3 Bdn. Eingeleitet von Arnold Zweig. 1923, (K.Vogels) Berlin.
15. (Hrsg.) F.v.Biedermann: Gespräch mit Lessing. 1924, (Propyläen) Berlin.
16. Johann Wolfgang von Goethe: Werke. 10 Bände. (△)
17. Johann Wolfgang von Goethe: Gedichte. (△)
18. Johann Wolfgang von Goethe: Die Leiden des jungen Werthers. (△)
19. Johann Wolfgang von Goethe: Die Wahlverwandtschaften. (△)
20. Johann Wolfgang von Goethe: Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit. (△)
21. Johann Wolfgang von Goethe: Goethes Sprüche in Reimen. (KBL 35) 1908.
22. (Hrsg.) Ernst Hartung: Alles um Liebe. Goethes Briefe aus der ersten Hälfte seines Lebens. 1907, (W. Langewische-Brandt) Ebenhausen bei München.
23. (Hrsg.) Johann Peter Eckermann: Gespräche mit Goethe. (△)
24. Wilhelm Bode: Goethes Leben im Garten am Stern. 4. Aufl. (XVI, 368 S.) 1913, (E.S.Mittler & Sohn) Berlin.
25. Emil Ludwig: Goethe. Geschichte eines Menschen. 3 Bde. 1920, (J.G.Cotta) Stuttgart.
26. Hermann Bahr: Um Goethe. (91 S.) 1917, (Volksbildungshaus Wiener Urania) Wien.
27. Richard Moritz Meyer: Goethe. (VIII, 580 S.) 1913, (G.Bondi) Berlin.

28. Viktor Hehn: Gedenken über Goethe. Neue Ausgabe mit einem Nachwort von Alexander Egger. (533 S.) 1921, (O.Riehl) Darmstadt.
29. Benedetto Croce: Goethe. Verdeutscht von Julius Schlosser. (XVI, 144 S.) 1920, (Amalthea) Wien.
30. Karl Muthesius: Goethe ein Kinderfreund. 2. Aufl. (VIII, 245 S.) 1910, (E.S.Mittler & Sohn) Berlin.
31. Heinrich Teweles: Goethe und die Juden. (205 S.) 1925, (W.Gente) Hamburg.
32. Heinrich Düntzer: Frauenbilder aus Goethes Jugendzeit. Studien zum Leben des Dichters. (XVI, 592 S.) 1852, (Cotta) Stuttgart.
33. August Wilhelm von Schlegel: Vorlesungen über dramatische Kunst und Litteratur. 2 Bde. Kritische Ausgabe. u. m. Anm. vers. v. Giovanni Vittorio Amoretti. (CXIV, 219, 339 S.) 1923, (K. Schroeder) Bonn.
34. Novalis: Werke in einem Band. Hrsg. v. Wilhelm v.Scholz. (414 S.) 1922, (W. Hädecke) Stuttgart.
35. Franz Blei: Novalis. (Die Literatur Sammlung Bd. 6, 64 S.) 1904, (Marquardt & Co.) Berlin.
36. Heinrich Heine: Werke in Einzelausgaben. Neu durchges. Orig.— Ausg. v. G.A.E.Bogeng. 1922, (Hoffmann & Campe) Berlin.
  - Buch der Lieder. (2. Aufl.) Einl. v. Georg Brandes.
  - Neue Gedichte/Tragödie. (XXVII, 337 S.) Einl. v. Herbert Eulenberg.
  - Romanzero. (XVI, 264 S.) Einl. v. Alfred Kerr.
  - Die Novellen. XXXIII, 278 S.) Einl. v. Jakob Schaffner.
  - Reisebilder. I — II. (XLVIII, 278 S.) Einl. v. G.A.E.Bogeng.
37. Heinrich Heine: Sämtliche Werke. Bd. 1, 3 u. 4 in 7 Bdn. Hrsg. v. Ernst Elster. 1890,
38. Heinrich Heine: Buch der Lieder. (△)
39. Heinrich Heine: Der Nachlaß. (△)
40. (Hrsg.) Friedrich Hirth: Heinrich Heines Briefwechsel. 3 Bde. 1914 — 1920, Berlin.
41. (Hrsg.) Heinrich Nubert Houben: Gespräche mit Heine. 1926, Frankfurt a. M.
42. J. Nassen: Neue Heine—Fund. (III, III S.) 1898, (H. Barsdorf) Leipzig.

43. Max J. Wolff: Heine. (VII, 657 S.) 1922, (C.H.Becksche Verlh.) München.
44. Kurt Sternberg: Heinrich Heines geistige Gestalt und Welt. (VIII, 346 S.) 1929, (W.Rothschild) Berlin.
45. Henri Lichtenberger: Heinrich Heine als Denker. Übersetz. v. Frdr. v. Oppeln–Bronikowski. (VIII, 312 S.) 1905, (C. Reissner) Dresden.
46. Hermann Wendel: Heinrich Heine und der Sozialismus. (100 S.) 1919, (Buchh. Vorwärts) Berlin.
47. Paul Beyer: Der junge Heine. (VII, 302 S.) 1911, (G. Grote) Berlin.
48. A. v. d. Linden: Das Heine – Grab auf dem Monmartre. (41 S.) 1898, (H. Barsdorf) Leipzig.
49. Ludwig Börne: Gesammelte Schriften. Bd. 2 in 12 Bden. 1862, Hamburg u. Frankfurt a . M.
50. Heinrich von Kleist: Sämtliche Werke. Bd. 1 in 2 Bden. Hrsg. v. Wilhelm Hegeler. 1925, (A. Ducker) Weimar.
51. Hans Brandenburg: Friedrich Hölderlin. Sein Leben und sein Werk. (221 S.) 1924, (H. Haessel) Leipzig.
52. Nikolaus Lenau: Werke. 2 Bde. Hrsg. v. Koch in Kürschners deutscher Nationalliteratur. 1888, (Union) Stuttgart.
53. (Hrsg.) H. W. Rath: Briefwechsel Theodor Storm–Eduard Mörike. (VIII, 190 S.) 1919, (J. Hoffmann) Stuttgart.
54. A. von Gleichen–Russwurm: Gottfried Kellers Weltanschauung. (127 S.) 1921, (Rösl & Cie) München.
55. Paul Heyse: Italienische Dichter seit der Mitte des 18. Jahrhunderts. 5 Bde. 1905, (J.G. Cotta) Stuttgart.
56. Richart Specht: Franz Werfel. (328 S.) 1926, (P. Zsolnay) Wien.
57. Das Hermann Bahr Buch. Auszüge aus seinen Schriften. (318 S.) 1913, (S. Fischer) Berlin.
58. Paul Wiegler : Figuren. 2 . Auflage. (291 S.) 1918, (Hyperion) Berlin/ München.
59. Stefan Zweig: Tersites. Ein Trauerspiel in 3 Auf. 1907, 1919, (Insel) Leipzig.
60. Stefan Zweig: Drei Meister. Balzac, Dickens, Dostojewski. (200 S.) 1920, (Insel) Leipzig.



61. Stefan Zweig: Der Kampf mit dem Dämon. Hölderlin, Kleist, Nietzsche. (324 S.) 1925, (Insel) Leipzig.
  62. Stefan Zweig: Drei Dichter ihres Lebens. Casanova, Stendhal, Tolstoi. 1928, (Insel) Leipzig.
  63. Thomas Mann: Bemühungen. (342 S.) 1925, (S.Fischer) Berlin.
  66. Hermann Hesse: Franz von Assisi. (84 S.) Die Dichtung (ein Sammlung u. Monographien) Bd.13. 1905, (Schuster & Loeffler) Berlin.
  67. Hermann Hesse: Blick ins Chaos. 3. Aufsätze. 1920, Bern.
  68. Hans Wolfgang Singer: Whistler.
  69. Carl Spitteler: Lachende Wahrheiten. Gesammelte Essays. (285 S.) 1920, (E. Diederichs) Jena.
  70. Raphael Koeber: Kleine Schriften. 1925, (Reimar Hobbing) Berlin. 1,2nur in Japan. Übers. ersch., 3 .hrsg. v. M. Kubo
- C. 北欧文学
70. Georg Brandes: Hauptströmungen der Litteratur des 19. Jahrhundertts. 3. Bde. Übers. v. E. R. Eckert. 1872-1890, 1924, (E. Reiss) Berlin.
  71. Georg Brandes: Aesthetische Studien: Übers. v. Alfred Forster. (X,III S.) 1900, (H. Barsdorf) Berlin.
  72. Georg Brandes: Deutsche Persönlichkeiten. (478 S.) 1902, (A. Langen) München.
  73. Georg Brandes: Anatole France. Übers. v. Ida Anders. (Sammlung: Die Literatur. Bd. 20., 75 S.) 1905, (Marquardt) Berlin.
  74. Georg Brandes: Goethe. Übersetzt v. Erich Holm u. Emilie Stein. (788 S.) 1915, 1922, (E. Reiss) Berlin.
  75. Georg Brandes: Miniaturen. Übers. v. Erich Holm. (342 S.) 1919, (E,Reiss) Berlin.
  76. Georg Brandes: Kindheit und Jugend. Erinnerungen an die Zeit des Wachsens und Werdens. (IV, 367 S.) 1924, (C. Reißner) Dresden.
  77. Georg Brandes: Urchristentum. Übers. v. E. Magnus. (149 S.) 1927, (E. Reiss) Berlin.
  78. Selma Langerlöf: Gesammelte Werke. Einzige autor. dtsh. Orig. Aufgabe. Bd. 1 in 10 Bdn. 1912, (A. Langen) München.
  79. Arthur Liebert: Strindberg. Seine Weltanschauung und seine Kunst.

(Sammlung Collignon. Bd. 5, 155 S.) 1920, Berlin.

80. Nils Erdmann: August Strindberg. Die Geschichte einer kämpfenden und leidenden Seele. Übers. v. Heinrich Goebel. 1924, (H. Haessel) Leipzig.
81. Arthur Babilotte: August Strindberg. Das hohe Lied seines Lebens. (VI, 134 S.) 1910, (Xenien) Leipzig.
82. Eugen Piem: August Strindberg.
83. Emil Reich: Henrik Ibsens Dramen. 20 Vorlesungen. 13 Aufl. 1925, (S.Fischer) Berlin.
84. Rolf Engert: Henrik Ibsen als Verkünder des dritten Reiches. (304 S.) 1921, (R. Voigtländerls) Leipzig.
85. Björnstjerne Björnson: Gesammelte Werke. Übers. v. Elias. 5 Bde. 1911, (S. Fischer) Berlin.

d. 英米文学

86. A. Ruest: William Shakespeare.
87. George Moore: Liebesleute in Orelay. Übers. v. M. Meyerfeld. 1. Aufl. 1925, (S. Fischer) Berlin.
88. Bernard Shaw: Die Aussichten des Christentum. (Als Einleitung zu „Androkus und der Löwe“ geschrieben.) 1. Aufl. 1925, (S. Fischer) Berlin.
89. Henry D. Thoreau: Walder. Das Leben in den Wäldern. Übers. v. F. Meyer. (X, 310 S.) 1922, (O. Hendel) Berlin.
90. John Henry Mackay: Sturm. (118 S.) 1925, (F. E. Fischer) Leipzig.
91. Johannes Schlaf: Walt Whitman. (KBL. 30) 1897, (Marquardt & Co.) Berlin.

e. 仏文学

92. H. Hatzfeld: Der französische Symbolismus. (171 S.) 1923, (Paetel) München/Berlin.
93. Briefwechsel zwischen Abaelard und Heloise. (△)
94. Taine: Die schönsten Essays. (295 S.) Nachw. v. Josef Hofmiller. 1924, (A. Langen) München.
95. George Sand: Meine Lebensberichte. Nach dem Franz. v. Rud. Jolowicz. Mit Einl. v. Ella Mensch. (152 S.) 1907, (H. Seemann Nachf.) Berlin.
96. Nikolas-Sébastien de Chamfort: Aphorismen und Anekdoten.

97. Guez de Balzac: Physiologie der Ehe. Betrachtungen über Glück und Unglück in der Ehe. Übers. v. H. Conrad. 3 Aufl. (447 S.) 1929, (Insel) Leipzig.
98. Arthur Holitscher: Charles Baudelaire. (Die Literatur. Bd.12, 63 S.) 1904, (Marquardt & Co.) Berlin.
99. Charles Baudelaire: Intime Tagebücher. Hrsg. v. Blei. (& 0 S.) 1920, (Georg Müller) München.
100. Clara Krollmann: Arthur Rimbaud und Krise des Abendlandes. (101 S.) 1929, (Volksvereins) M.–Gladbach.
101. Paul Verlaine: Gesammelte Werke. Übers. v. St. Zweig. 2 Bde. 1922, (Insel) Leipzig.
102. Stendhal – Henri Beyle: Lucian Leuwen. Hrsg. v. Jean de Mitty. Übers. v. Edgar Byk. 2 Bde. (293, 315 S.) 1921, (Deutsche Verlags- u. Druckhaus Bong & Co.) Berlin.
103. Stendhal – Henri Beyle: Römische Spaziergänge. Übers. v. Friedrich v. Oppeln– Bronkowski u. Ernst Dietz. (L III, 433 S.) 1913, (E. Diederichs) Jena.
104. Henri Beyle – de Stendhal: Gesammelte Werke. Bd. 2, 5, 7 u. 9 in 10 Bdn. Übers. v. F. v. Bronkowski. 1921 – 1923, (Prophläen) Berlin.
105. Rudolf Kayser: Stendhal oder das Leben eines Egoisten. (331 S.) 1928, (S. Fischer) Berlin.
106. Gustave Flaubert: Gesammelte Werke. Bd. 5 Hrsg. v. Wilhelm Weigang. 1923, (Georg Müller) München.
107. Gustave Flaubert: Tagebücher. Bd. 3 Besorgt v. Ernst W. Fischer. 1919, (G. Kiepenheuer) Potsdam.
108. Gustave Flaubert: Der Roman eines jungen Mannes. Übers. v. Alfred Gold u. Alphonse Neumann. 1919, (B. Cassirer) Berlin.
109. Gustave Flaubert: Erinnerungen eines Narren. Übers. v. Rud. Soomer. 2 Aufl. 1920, (Hyperion) München.
110. Gustave Flaubert: Bouvard und Pecuchet. Übers. v. E. W. Fischer. (319 S.) 1922, (Kiepenheuer) Potsdam.
111. Marcel Proust: Tage der Freuden. Übers. v. Ernst Weiß. (258 S.) 1926, (Propyläen) Berlin.

112. André Saurés: Portraits.
113. Henri-Frédéric Amiel: Tagebücher. (△)
- f. 伊文学
114. Karl Voßler: Leopardi. (X V, 423 S.) 1923, (Musarion) München.
- g. 露文学
115. Maxim Gorki: Erinnerungen an Tolstoi. Neue erg. Aufl. 1920, (Der neue Merkur) München.
116. René Fülöp-Miller: Der unbekannte Tolstoi. Die offizielle Ausg. d. Familie Tolstoi. 1927, (Amalthea) Wien.
117. (Hrsg.) Heinrich Mayer-Beufey: Tolstoi-Buch. (VIII, 256 S.) 1906, (F. Wunder) Berlin.
118. F. M. Dostojewski: Sämtliche Werke. Bd. 1, 12 u.20. Übers. v. Moeller van den Bruck. 1920, (R. Piper) München.
119. F. M. Dostojewski: Raskonikoff. (△)
120. Frau Anna Grigorevna Dostojewski: Tagebuch. Die Krise Dostojewskis. Hrsg. v. Kurt Kersten. 1925, Berlin.
121. Paul Natorp: Fjedor Dostojewskis Bedeutung für die gegenwärtige Kulturkrisis. 1923, (E. Diederichs) Jena.
122. Werner Mahrholz: Dostojewskij. (71 S.) 1923, (Furche) Berlin.
123. Michael Grusemann: Dostojewski. (199 S.) 1921, (Paetl) Berlin.
124. Jolan Neufeld: Dostojewski. Skizze zu seiner Psychoanalyse. (93 S.) 1923, Internationaler Psychoanalyt. Verlag) Wien.
125. Karl Nötzel: Das Leben Dostojewskis. (846 S.) 1925, (H. Haessel) Leipzig.
126. A. L. Wolynski: Das Reich der Karamasoff. Übers. v. Alxdr. Eliasberg. (221 S.)
127. Wlodimir Solovjeff: Drei Reden zum Andenken Dostojewskys. Übers. v. Gräfin v. Pestalozza. (61 S.) 1921, (Matthias-Grünewald) Mainz.

---Fortsetzung---

1987. 4 .20

## 註

- (1) 参照 宇野浩二「文学の三十年」(昭17.8,中央公論社) P.279.

宇野浩二は、「大正56年頃」「榎町」と記しているが、生田春月・花世が榎町59番地に居住したのは、大正3年8月から翌年8月までである。また大正5,6年であるならば、牛込天神町53番地である。宇野浩二は、自ら英語本から翻訳した「ハイン詩集」の出版依頼等の件で、数回、間をおいて、生田春月を訪問しているの、回想の事実に混乱が生じていると思われる。

- (2) *ibid.* P.280-281.

- (3) 中村武羅「生田春月のこと」(昭5.6,「詩神」) P.101.

- (4) 真船正己は、明治36年に福島県に生まれ、旧制白川中学校を卒業後、上京して、丸善書店に就職した。昭和3年八ツ岳登山のあと、健康をそこね、5年間郷里で療養ののち、昭和8年復職し、昭和19年まで同書店に勤務した。作詩の用件で生田春月を訪ねる際、注文の洋書をよく届けたという。彼は同郷人で詩友でもある大島庸夫にさそわれ、春月に師事することになり、雑誌「文芸通報」や「詩と人生」に小曲を多数投稿し、また春月門下の若い詩人たちの同人誌「烽火」では、社会・自然を観照し、直截な表現に漸新な意匠と重厚な詩法とを織り込み、詩的感動の直接性を目指す力作で、詩壇の注目をあびた。戦後、毎日広告社に勤務してからは、俳句誌「馬酔木」「あら野」「高潮」の同人となったが、句集「歳月」(昭52.6,自家出版)を発表したあと、短歌へ転向し、宇佐美雪江の主宰する「あゆみ」の同人として活躍している。ところで、春月の購入した書籍の名称は、今日、全く記憶していないということである。

これに対して、明治42年に山口県豊浦郡金道村に生まれた西島治子は、大正15年におじをたよって上京し、昭和3年頃、生田春月・花世夫妻のもとで、お手伝い兼助手として働いていた。春月の死後、剃髪し、仏門に入った。昭和55年夏、筆者が山梨県の身延山丈六堂で彼女に面会したとき、廉皎という法名をもち、日蓮宗尼僧法団本部の最高責任者として、後輩の指導にあたり、また今日でも、訪印して仏跡を巡礼したり、日本各地を歴訪して、布教に尽力している。幸運にも、春月の50回忌をすませた翌年のことでもあり、彼女が他所に保管している春月の肉筆原稿や手鏡等を焼却処分しようと考えていた時点で訪問したことがわかり、それらを恵贈された。だが、筆者は、これらを春月の生地にある鳥取県立米子図書館にあずけたが、それらの中に、スクラップ帳がある。しかもそこには名刺のうらを使用したメモが貼きつけられており、書店の住所・地図、和書、翻訳書等を記したもののほか、8枚ほどには下記のような洋書名ないし著者名が書かれている。

★ナシ Dubrowski, Die Bauernbewegung in der russischen Revolution. 1927.

N. O. Krollmann, Arthur Rimbaud. Best 20 XII

以上ハ只今在庫品ガゴザイマスク

又

Strindberg, 評伝ガアツタヤウス見カケマシタガ誰ノ何トイフモノデスカ

ゼヒ御面倒デモ御一報願ハマセンデセウカ

★著者名不詳

Strindberg, die Krisis der Europäer.

トイフヤウナ 標題テ7.50位ノ本

★Alexander Berkmann, Die Tat.

(早稲田書店への地図)

★Kierkegaard の全集中の一冊 (福本への地図)

★題名 Nihilisten (東条, 岩波, 東条, 稲垣への地図)

二円ノ本。背中ニ紙ヲハッテペン文字デカイテアル

「著者ハ多分」という5文字が抹消してある

★Verlaine, Sämtliche Werke. 2 Bde.

独訳 (ヴェルレエヌ全集)

赤い皮の本2冊 六円

大学 正門前 郁文堂

★Strindberg 七円五十銭位ノ本

★1. Meysenbug, (あとちぎれた切片)

1. Förster-

これらが記載された名刺の住所 (牛込弁天町4番地) 等から、これらの洋書は、昭和3年以降、春月が西島治子に購入依頼したものと断定してよい。なお、これらの書籍の大部分は「生田博孝保管生田春月蔵書目録」の中にふくまれている。